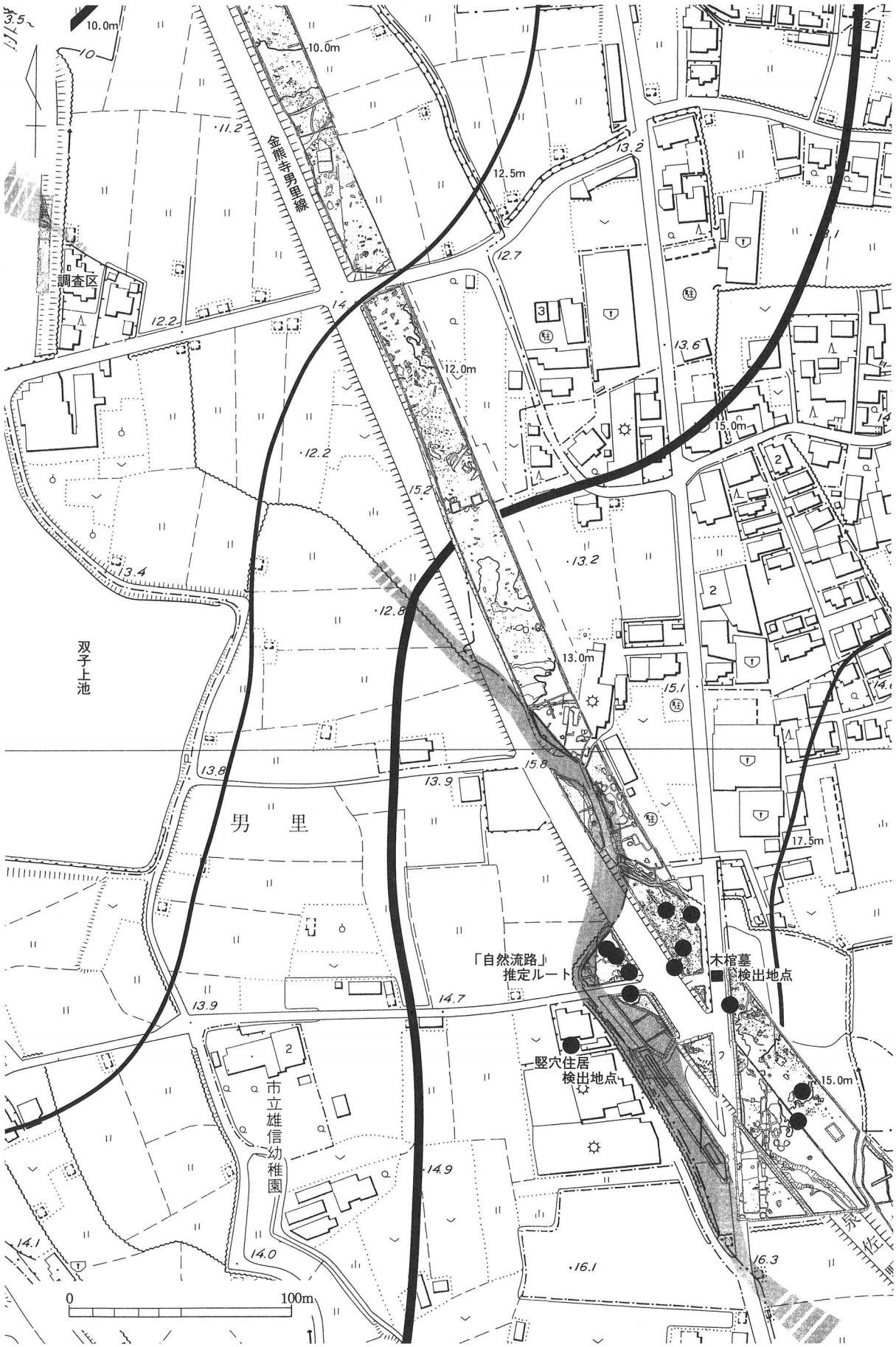
の黄色シルト層からいくつか出土している。弥生時代の住居跡等の遺構・遺物は右岸上流の都市計画道路敷きの調査で標高約13～16m地点で検出されている。住居跡群の長径（南北）約100m、短径（東西）約50mで、土壙墓群を含む。西側を画する溝（流路）は幅約20m、深さ２m以上を測る。今回の調査で検出された溝（流路）はその延長又は枝線にあたると考えられ、溝底のレベル差は５mある。これらの遺構は男里川の氾濫により不安定な状態で存在する。古墳時代にいたっても安定的な集落はみられず、男里遺跡の流路にＶ様式から庄内期の土器及び製塩土器が流入している。標高５m前後を測る浜堤の後背湿地の縁辺部に形成された沖積段丘上に５世紀後半代の竪穴住居跡が出現する。標高10m前後の洪積段丘上にはようやく６世紀後半から掘立柱建物群が現れ、後に双子下池にかかる個所にもしがらみが設けられ、流路を制御する試みがなされる。つづく７～８世紀代には阪南市田山遺跡・山田海岸遺跡・波有手遺跡・泉佐野市湊遺跡等で多数の掘立柱建物群が展開する。大阪湾岸の蛸、塩、魚、貝類等の収穫物を集積し、中央へ搬出する機能の建物が建てられたかのように、一挙に出現するのである。史跡海会寺跡をはじめとするこの時期の泉南市域の遺跡の展開にもそうした痕跡は確認される。次の時期にはこうした中央の権力が衰退し、在地の勢力が平野を開発するために双子池を築造したのか、又は中央権力への収奪を強化せんと紀州への交通の要衝として街道を整備したのか、平安時代に至り池に堤が築かれる。この時期に男里川も現在の河道に近づけられ、海岸線に規則的な条里地割りが築かれ、集落も現在の配置に近づいていったと考えられる。その結果双子池の下流域は安定的に耕地化され、大型の掘立柱建物を中心とする集落群が展開する[①]。中世に至り恵まれた沖積段丘の黄色粘土を原料として海の恵みの蛸を収穫するため大蛸壺が製作・焼成される。それからの泉南市域は大規模な大蛸壺生産地域で、多くの焼成窯が検出されている。また、近世後期に砂糖、綿等換金作物の生産が発展し、河川敷などで作付けされたと記録されている。（表紙写真）

以上、今回迄の調査で得られた資料にもとづいて、男里遺跡の原始古代から中近世に至る遺構・遺物の変遷を推定した。

第２節　泉州南部における弥生時代中期の遺跡について（第15・16図、第１表）

今年度の調査では弥生時代中期から後期の流路が確認された。そこで泉州南部の既往の調査で得られた資料をもとに若干の事実を集め、弥生時代中期から古墳時代について概観してみたい。

泉州地区の弥生時代中期集落については既往の調査によりその展開過程がいくつか示されている。その多くは拠点集落を中心にして、各遺跡が共同体としてまとまっている様子を描いている。岸和田市地域について見ると、天の川流域に銅製品の出土や大溝の周辺に展開する住居群が見られる下池田遺跡[②]を中心に、春木川流域の栄の池遺跡[③]、津田川流域の畑遺跡、土生遺跡[④]などがあげられる。貝塚市域の土生遺跡、石才南遺跡[⑤]でも弥生時代中期の土器が出土している。泉佐野市地域では諸目遺跡[⑥]、三軒屋遺跡[⑦]、上之郷遺跡[⑧]および棚原遺跡[⑨]、船岡山遺跡等が認められ、いずれ



第15図　調査区周辺の遺構概略図

第16図　泉州南部における主要な弥生時代中期の遺跡分布

も小単位で地域世界を形成している。泉南市域では男里遺跡を拠点集落として位置付ける見解が提示されている。向井山遺跡は標高21～22mに立地し、方形周溝墓を検出しており[10]、さらに阪南市域でも神光寺遺跡[11]が見られ、岬町では淡輪遺跡[12]で方形周溝墓が検出されている。

以上の弥生時代中期の集落が泉州南部の各地域に展開する事実は既に指摘されているがその内容については余り語られていないのではないだろうか。事実、古墳時代には摩湯山古墳、久米田古墳群が存在し、国史跡貝塚丸山古墳、淡輪古墳群に見られる前方後円墳が出現する地域と、そうでない地域に分けられる。こうした格差が弥生時代中期における集落の内部のなんらかの差異又は後期、古墳時代初期の要因に起因するのであろう。このような各時代の各地域の遺構・遺物の差異を追求してなんらかの見通しを得たいと考える。

今回調査した男里遺跡では弥生時代中期集落は標高14m前後、竪穴住居跡が検出されるエリアは長径（南北）100m、短径50m程度である。方形周溝墓はなく、木棺墓が検出されている。周囲に流路及び溝がめぐる。（第15図）今回弥生時代の土器を出土した溝はその流路の延長と考えられる。弥生時代後期には近接して滑瀬遺跡が存在する。新家地域では弥生時代中期に新家遺跡が、新家オドリ山遺跡が後期に認められる。

岸和田市下池田遺跡は標高約16m、住居跡の範囲径約400mを測る。畑遺跡では連結式の方形周溝墓群が確認されている。弥生時代後期から土器製塩が行なわれた土生遺跡は標高17m、住居跡の範囲径40m以上を測る。同じく後期にはどぞく遺跡が標高60～70mに出現する。貝塚市石才南遺跡は標高29～30m、住居跡の範囲径約100mを測り、土壙墓群を含む。三軒屋遺跡では弥生時代中期の住居群を検出する集落範囲は500mの範囲の中に２～３ヶ所に分散している。標高は21～24mである。方形周溝墓は単独で存在し、近接して土壙墓群を伴なっている。棚原遺跡は標高49～56mで

第１表　泉州南部地域における弥生～古墳時代の遺跡の動向

	弥生時代中期の遺跡名	集落の展開する標高	墓制	銅鐸の有無	土器製塩	高地性集落	集落の展開する標高	前方後円墳
岸和田市	下池田遺跡 栄の池遺跡	16m 13m	畑遺跡 連結式方形周溝墓	流木銅鐸	土生遺跡 （弥生時代後期）	どぞく遺跡	60～70m	摩湯山古墳 久米田古墳群
津田川・近木川								
貝塚市	石才南遺跡	30m	土壙墓					丸山古墳
佐野川								
泉佐野市	三軒屋遺跡	21～24m	単発型＋土壙墓		湊遺跡 （弥生時代後半）	棚原遺跡	50m前後	
樫井川								
泉南市	向井山遺跡 男里遺跡	21～22m 12m	方形周溝墓 木棺墓	林昌寺銅鐸		滑瀬遺跡 新家オドリ山遺跡	50～75m 38m	
男里川								
阪南市	神光寺（蓮池）遺跡	25m	単発型方形周溝墓		尾崎海岸遺跡 （古墳時代前期）			
茶屋川								
岬町	淡輪遺跡	25m	単発型方形周溝墓					淡輪古墳群

径約80mの弥生時代後期の集落が存在する。阪南市の神光寺遺跡は標高25mで、方形周溝墓が確認されていると言う。岬町淡輪遺跡の方形周溝墓は単独で、標高25mに位置している。

以上のように、洪積段丘の低位から中位段丘に立地していた弥生時代中期の集落跡周辺から採集される資料を概観すると、方形周溝墓、集落立地、集落範囲などの差異より、海岸部や段丘部、丘陵部、山間部の共同体の拡張・分散により、共同体や地域間の方形周溝墓・銅鐸祭祀の連合から、沖積段丘および洪積段丘に展開する集落を核として、前方後円墳の時代に向かっていく様子がうかがえるのである。

これらのことから、中期の方形周溝墓群という墓制で共同体内の結合が累代的に確認され、流木銅鐸で共同体祭祀を行ない、弥生時代後期の土器製塩を行った、岸和田市地域の遺跡群が広い沖積段丘と長い海岸平野部を活用して農耕生産と狩猟採集のシステムを共同体間の意識の紐帯として確立させた。その結果摩湯山古墳を産み、続いて久米田古墳群を築造してゆく政治関係を岸和田地域に形成し、泉州南部地域を代表した集団となったと考えられるのである。そのようなシステムを確立しえた遺跡群は岸和田市地域以南に存在しえなかったのである。しかしこのことがただ牧歌的な泉州南部の弥生時代を物語ることになるのではない。むしろ、このことこそが和泉山脈を媒介とした泉州南部と紀伊との力関係、大阪湾を媒介とした淡路島から摂津・紀伊にかけての大阪湾沿岸の漁業集団との地域間交流を通して古墳時代への試行錯誤が行われたことを物語る地域の歴史の独自性を示すものと考えられる。以上が地域の歴史を学習する歴史教育の教材として評価されなければならないことを認識しておきたい。

註 ① 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1996）
② 岸和田遺跡調査会『下池田遺跡第２次発掘調査報告』（1987）
③ 岸和田遺跡調査会『栄の池遺跡』（1979）
④ 岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要』（1976）
貝塚市教育委員会『貝塚市遺跡群発掘調査概要14』（1992）
⑤ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『石才南遺跡発掘調査報告書』（1988）
⑥ 泉佐野市教育委員会『諸目遺跡』（1992）
泉佐野市教育委員会『諸目遺跡』（1994）
⑦ 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要８』（1988）
大阪府教育委員会『三軒屋遺跡発掘調査概要Ⅲ』（1989）
泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』（1993）
泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』（1994）
⑧ 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』（1997）
⑨ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『棚原遺跡発掘調査報告書』（1995)
⑩ 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告書』（1972）
⑪ 阪南町教育委員会『神光寺遺跡発掘調査報告書』（1982）
⑫ 大阪府教育委員会『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅵ』（1984）

最後に泉州南部の市町の文化財担当者の方々に短時間に無理をお願いしてとにかく多種類の土器の胎土分析ができたので今後の比較資料として活用されることを期待するとともに、三辻先生の分析資料を掲載して皆様方にお礼を申し上げたい。泉州をグローバルに観察して個性的な歴史観を創造したいと考える。